

やすだ のぼる

安田 登

能楽師（下掛宝生流：ワキ方）

寺子屋 講師 （阿弥陀寺）

こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』  
『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

# こまったときの 親鸞聖人の 巻



イラスト 中川 学

## 「こころは蛇蝎のごとくなり巻」

還暦というの  
は少し後に実感  
がくる。

干支がひとま  
わりして生まれ  
変わるから、赤  
ちゃんになった  
気持ちになれと  
いうことか、還  
暦には赤いもの  
が贈られる。娘  
からも「赤い  
ちゃんちゃんこ  
を送ります」な  
んていわれた。むろん固  
辞した。「じゃあ、赤い  
パンツは」などともいわ  
れたが、冗談ではない。  
人生八十年のご時世、還  
暦といっても現役バリバ  
リ、自分が年寄りになっ  
たなんて気持ちは全くな  
い。

だが、二年経ってみて  
じわじわときた。周囲か  
らである。

公務員をしていた友人  
たちは、みな定年退職を  
し、悠々自適の生活をお  
くりはじめた。引退とい  
うことが一生ない能楽師  
などをしていると、その  
生活はまことに羨ましい  
限りである。落語に出て  
来るご隠居のように、若  
い人の相談を受けたり、  
孫を抱いて縁側でぼんや  
りしたり、そんな生活を  
したいものである。

が、彼らにいわせると、  
それどころではないとい  
う。新しい生まれ変わり  
は、新しい人生の危機を  
も運んできた。

ひとつは、近ごろ流行  
りの熟年離婚である。  
「お父さんがお仕事をし  
ているあいだは周囲の目  
もあるし、我慢していた  
けれども、もういいで  
しょ」と言い出されると  
いう。

熟年離婚・定年離婚の  
場合は、女性から言い出  
されることがほとんどだ。  
しかも、男にとっては寝  
耳に水である。

「そんなそぶり、まっ  
たく見せなかったのに」

：なんていうと、「それ  
に気づかないから離婚を  
されるんだ」と、女性の  
友人からはあきられたよ  
うにいわれる。「そんな  
んじゃ、これから先の人  
生も暗いわね」などと、  
まさに泣きつ面に蜂、踏  
んだり蹴ったりである。

ところが還暦の危機は  
これだけではない。近ご  
ろ増えているのは「同じ  
墓に入りたくない」とい  
うものだ。

「死ぬまで一緒にいる  
のなら、まだ我慢はでき  
る。でも、墓に入ってか  
らも未来永劫、あなたと  
一緒というのは、考える  
だけでぞつとする」とい  
われるのだそうだ。  
「これはこわいぞ」と友  
人はいう。

「…ということば、お  
れは未来永劫、冷たい墓  
の中でひとりでいるとい  
うことではないか」と。  
なるほど。いわれてみ  
れば確かにそうだ。定年  
離婚よりもこわいかもしれ  
ない。

定年後すぐにいわれた彼  
の方がまだましなのです  
ぞ。自分が動けなくなり、  
まさに臨終というそのと  
きに、死に水とともに耳  
元でこれを囁かれたらど  
うするか。文字通り「寝  
耳に水」、どうしようも  
できない。

これはちゃんと考えて  
おいた方がいい。  
女性の言い分ももつと  
もである。

我慢というものは、期  
限があるからできるもの  
だ。墓に入ったあとの、  
いつ終わるとも知らぬ時  
間を本当にこの人と一緒  
にいるのか。期限がない  
我慢には耐えられない。  
そう思うのも、もつとも  
なことである。

しかし、じゃあ、誰と  
入ればいいのかというと、  
これまた難しい。

近頃は「異性なんてど  
うせわかりあえないのだ  
から」と友だち同士で墓  
に入るといふことも流  
行っているらしい。ある  
いはひそかに「あの人と  
なら」なんて思っている  
人もいるだろう。が、よ

く考えてみよう。  
いまの人だって、会っ  
たころには「この人こそ、  
わが運命の人」と思った  
のではないだろうか。  
恋人のときには、かわい  
いと思ったあのクセも、  
ワイルドだと感じていた  
このクセも、いざ結婚し  
てみると鼻につく。下品  
で粗野な欠点に見えてく  
る。

いやいや、結婚した当  
初は、そうでもなかった。  
毎日、毎日のちよつとず  
つの「我慢できないこと」  
が積み重なり、だんだん  
イヤになつてきた。

どんな人にも多少しく  
らいの「我慢できないこ  
と」はある。その、ほん  
のちよつとの我慢できな  
いことが、未来永劫積み  
重なつていくことを考え  
ると、ああ、いったい誰  
と墓に入ればいいんだ。  
：と悩みがピークに達し  
たときには、やはり親鸞  
上人におうかがいするの  
である。



親鸞聖人のご和讃に「修善も雑毒」というお言葉がある。「どんなに善い行いをしても、人間のすることには毒が混ざっている」というのだ。

ちなみにこのお言葉は、仏道修行のお話をされているのだが、私たち在家のものはこれを俗事にあてはめて読むことをお許しいただきたい。

さて、相手に不満を持つのは「私はこんなにしてあげたのに」という気持ちがあるからだ。

せっかくご飯を作ったのに「おいしい」のひとこともない。せっかく洗濯してあげたのに、お礼のことばもない、そんな風に夫に思う。

そんなことをいうなら夫だってそうだ、という人だっているだろう。なに不自由な生活ができるのは誰のかせぎのおかげだ。俺がいるからこの家はもっているんだ、などと男は思う。

友だちもそうだ。あの人にはあれもしてあげた、これもしてあげた。あれ

を教えたのもあたしだし、これを教えたのもあたし。それを自分の手柄にする。そんな、さまざま「してあげた」が「修善」である。そして、その修善には毒がまじっていると聖人はおっしゃる。

この「してあげた」ということ自体が毒である。「ありがたい」と言われたい気持ち、思われたい気持ちがある。

「でも、人間だから当たり前でしょ」というだろう。そう、当たり前だ。ご和讃には「こころは蛇蝎のごとくなり」とある。私たちの心は蛇やサソリのようなものだということだ。人間の心自体に毒がまじっている。

だいたい、人が感謝をしないということも、当たり前のことなのだ。「ありがたい」という気持ちは長続きしない。

何かをしてあげる。すると最初は「ありがたい」という。だが、それはすぐに「当たり前」になる。それだけならまだいい。それはすぐに「もつと」

になる。人の欲望は限りがない。「もつと」はどんなふくれあがり、それにはとてもこたえられなくなる。

すると、最初は「ありがたい」といつていた人から、なぜか恨まれたりもするのだ。

ひどい話だ。だがこれが蛇やサソリの心を持つ人間の「当たり前」なのだ。

「自分は違う」という方胸に手を当ててよく考えてみよう。親に対してどうだったか、上司に対してどうだったか、子どもに対してどうだったか。

金子みすゞは「みんなちがってみんないい」と言ったが、心に関していえば「みんな同じでヘビ、サソリ」なのである。



今回紹介した親鸞聖人のご和讃の全文を読んでみよう。

「悪性さらにやめがたし／こころは蛇蝎のごと

くなり／修善も雑毒なるゆゑに／虚仮の行とぞなづけたる」

私たちの心は好んで悪を作りたがる蛇や蠍のようなもの。善行の中にも煩惱の毒は混じるので、どんな修行もいつわりの行になる。

本当にすばらしいご和讃だ。

ヘビやサソリの心を持つ人間である限り、最初に向いている方向が違っている。修行をすればするほど毒が増し、地獄に近づく。だからこそ私意を捨てて阿弥陀様にお任せしようというのが親鸞聖人である。

伯父のひとりが太平洋戦争中、海軍の飛行機乗員だった。赤トンボという練習機があったそうだ。空中で操縦を失敗して、

にっちもさっちもいなくなったら手を放す。そうすると自然に水平飛行に戻ったそうなのだ。

私意を捨て、虚仮の行をやめればヘビやサソリの心のそのまま、阿弥陀様は救ってくださる。

プロのお坊さんには叱られるかもしれないが、私は地獄や極楽は、死後の話だけではなく、この世にもあると思っている。

だから、阿弥陀様の救いもこの世にあるに違いない。本当に大変なことがあると、無理に何かをするのではなく、赤トンボよろしく両手を放し、阿弥陀様にお任せする。

それは自分の心がヘビやサソリだと自覚することから始まる。

おっと、そうだった。今回は、誰とお墓に入ったらいいかという話をするんだった。詳しくは次回にもう一度することに

して結論だけをいえば、この際、誰と入ろうなんてことを考えない方がいい。私意は捨てる。

いろいろ不満はあるかもしれないが、よほどの不満でないかぎり、そのままがいい（むろん、よほどの不満があるなら考えてもいいかも）。

このことについては次回にもう一度、扱うことにしましょう。



# 図書紹介



『あわいの時代の「論語」』

―ヒューマン2・0

著者 安田 登

装挿画 中川 学

1800円＋税

春秋社

未来を変える力を、心の「作用」とすれば、「不安」は心の「副作用」です。その副作用に対する処方箋を私たちに与えてくれたのがお釈迦様であり、イエスであり、そして孔子です。みな二〇〇〇年以上も前の方たちです。それなのに今に至るまで、このお三方を凌駕する人物が現れないのは、「心の時代」がまだ続いているからです。本書では、心の時代のもっとも重要な書物の一つである『論語』をガイドとして、考えていきたい。（抜粋）